

患者になって

患者さんに見てもらえば、「診てもらったなら、元気で健康な医者の方が良い」と思うだろう。が、実は、患者になったことがある医者のほうが良いかもしれない。

約10年前だった。医者しらずのワッシーも、視力の低下を感じて眼科のA先生に診てもらったことになった。白内障ではなく、加齢性黄斑変性症おちはんへんせいしやうと診断された。

ここ1、2年、さらに視力が落ちて、メガネで矯正できなくなった。仕事に支障はないが、好きなゴルフでボールの飛び先が見えなくなってきた。だが、黄斑変性症は、加齢による目の老化だ。諦めるしかないと思っていた。

あまりに周りがやかましいので、イヤイヤB先生を訪ねた。水晶体の混濁を見せられて、「白内障です。手術するなら、C先生を紹介しましょう」と、とんどん話は進んでいった。

で、C先生は、「黄斑変性はありますが、軽いものです。手術に使うレンズを選

んでください」と、ここでも話はベルトロンベアー式に進んでいくのだった。

えっ、手術の合併症は？予後は？でも、書いたものは渡されたが、説明はない。最後は、手術日を受付のひとと決め、手術同意書を渡された。「術後に支障が起きても文句は言わない」ということか。

どの先生も、患者さんたちの評価も高く、優秀な医者たちである。が、ワッシーも、親にももらった体にメスを入れるのだ。もっと知りたいことや相談したいこともあった。が、つい、ためらった。どうして眼科というのは、こんなにも患者さんが多いのだろうか。

ふと、自分の患者さんたちのことが気になった。時間に追われて、治療方針やその後、薬の副作用などについて、説明が足りていないのでは？患者になってみて、初めて気付くこともある。人のふり見てわがふり直せ。ワッシーとして、反省くぐりはするのだ。

(石黒修三||いしぐろクリニック・脳神経

外科専門医…7/19北國新聞掲載)